

新世界

miyama0320

好きだったひとが、その本を読んでいた。

と言っても、いま考えてみれば憧れに近い片思いだった。大学入学と同時に始めた地元の市立図書館でのバイト。彼は大学4年生の先輩だった。

田口ランディさんの『もう消費すら快樂じゃない彼女へ』。どこか刺激的なその題名と、これまた前衛的な印象を与えるカタカナの作家名、そしてそれを読んだらもっと先輩に近づけるんじゃないかというような青い期待に導かれるように、それを手に取ったのだ。

私を出迎えてくれたのは、高校卒業までは知りえなかった原色の世界だった。表題作に登場する、寂しさのあまりアパートの部屋をゴミで埋めるホステスのお姉さん。自身も「ホステスになってみたかった」と素直に書きつづり、時には実験のため狭いコインロッカーに身体を押しこんで新たな幸せを発見するランディさん。タイトルにもある「消費」が「快樂」になることも初めて知った。（もっとも、それを実感できたのはさらに数年経ってからだったが。）

この本が教えてくれた新しい価値観のみならず、先輩の世界までも垣間見ることができたようなふわふわとした満足感は、その後の私の方向性を鮮やかに変えた。それまで「水商売」にいかかわしいイメージしかもっていなかった私が後にスナックのホステスのアルバイトを始めたのも、ひとえにこのためである。入店当初、仕事の筋が悪すぎて「みいちゃんは宇宙人だね。」とまで常連さんに言わしめたスナックでの2年間の経験は、結果的に4年続けた図書館以上に私を成長させてくれた気がする。先輩への想いが成就することはなかったが、この本にまつわる瑞々しい感情は、ずっと忘れないだろう。

後日談。この本に巡り合って数々の鱗をまなこから落とした私は、大学卒業後に就職した会社で中堅社員になった頃、8歳下の社員の女の子に二十歳のバースデイ・プレゼントとしてこの本と『新宿二丁目のほがらかな人々』の文庫版を贈った。して、読書好きな彼女の反応は・・・「（先輩が学生の頃には）こういうこともあったんですねえ。」というような至極淡白なもの。当時の私は、「時代遅れのものをあげてしまったかな」となんとなく反省。確かに、プレゼントした時点で私がリアルタイムで読んでいた時から実に10年近くのギャップが在った。世代間によつての受け取り方の相違もあり、もちろん人によつてのそれも違う。それでも、自分の好きだった本を人にも読んでもらえて嬉しかった。またひとつ、この本から学ばせてもらった私であった。